

[エッセイ No.21 音楽とチーズの音楽祭!]

ザルツブルグの音楽祭は、世界中で有名になった。そしてまた、オーストリアのほとんど最西端の街、ブレゲンツでの夏の湖上音楽祭も、ボーデン湖の自然を生かした舞台演出で愛されている。

そこからもう少し南に下ると、本当にのどかな田舎の風景にぶつかる。輝く朝日に霧がたなびき、まわりの山々が美しいシルエットを見せる中、草の匂いがして、牛たちの首につけられた鈴の音が聞こえると、小さな小さな可愛い「音楽祭の街」が目の前に現れる。シュヴァルツェンブルク、というのがその村の名前だ。

教会が一つ、美容院もパン屋さんもチーズ屋さんも、小さなスーパーマーケットも一つ。でもこの村の人たちが皆で大切に、誇りにしているもの、それが「シューベルティアード」。

「シューベルティアード」というのは、もともとは小さな家族的雰囲気の中、オーストリアの作曲家シューベルトの音楽を愛する人や友人たちが集まって、皆でシューベルトの音楽を演奏したり聴いたりする場であった。

そして50年ほど前、新たに、故・ヘルマン・プライという世界的に有名なドイツのバリトン歌手が、演奏者も聴衆も一体になってシューベルトのコンサートを楽しむ音楽祭を、と思い立ち、最終的にこの田舎の村にそのアイデアを根付かせた。

今でこそ目立たない小さな村だが、この村はその昔、16世紀から17世紀にかけては、商業的に大変重要な位置を占めていたと聞く。ミラノスカラ座のロージェに席を所有していたほどの、裕福な人々も大勢住んでいたそうだ。

というのも、この地の特産は何といってもチーズ。特に“ブレゲンツァーヴァルトのチーズ”と言えば、昔からその品質や味わいで有名であり、そのチーズの取引は、必ずシュヴァルツェンブルクを通過して行われていた。その当時使われていた大きな家々も残っている。

人々がチーズを媒体として南に北に活発に行き来していたこの頃、隊をなして運ばれるチーズのコンヴォイで、村は経済的にも大変賑わったそうだ。“知る人ぞ知る”地であったこの村、現在では、ヨーロッパやアメリカ、カナダ、中近東からも訪れる音楽ファンで一杯。ペンションの朝食で出される焼き立てのパンと自家製バターやチーズ、あまりにも美味しく、いくらでも食べられそうだ。

すべてが木造りの、音響のいいコンサートホールには、世界各国から一流の演奏家が集まり、そのコンサートのほとんどがオーストリア放送局によって録音、放送される。いつの間にか、演奏家にとってこの音楽祭に招かれることが、一つのステータスになってきた感もある。設立初期のころは、演奏はシューベルトの作品のみ、が

コンセプトだったが、今ではシューベルトを主体とはするものの、だんだんとレパートリーが他の作曲家にも広がってきている。

ホールの大さのせいでオーケストラの演奏会は多くないものの、その代わりに朗読や講演、講習会も催され、好きな人は一日中音楽の中に浸ることができる。往年の大スターたちが午前中に厳しい公開レッスンをするかと思えば、クラシック界の今をときめく若手のコンサートも夕方に、夜にと目白押し。

家族連れの演奏家が仲間のコンサートを聴きに行ったり、皆と一緒にコーヒーを飲み、食事をし、笑い合い、語らい、散歩に出かけ、ジョギングにいそしみ、コンサートの後に「打ち上げ」で騒ぐ。シュヴァルツェンブルクのビストロの、戸外の樹々の木陰では、聴衆も音楽家も同じ人間同士として楽しみを分かち合う。こんな音楽祭は他にはなかなかない。

コンサートホール脇の草原では、時折、「シューベルティアード」の支援者でもある村長さんが、草刈り機に乗っているところにお目にかかることもある。恐らく、世界一雄大で美しい自然に囲まれたコンサートホールに違いない！

9月初旬、「シューベルティアード」のシーズンが終わりに近づく頃、まわりの山の上では雪の気配がしてくる。農家の人たちは草刈りに精を出し、それまで峰の牧場で草を食んでいた牛たちも冬支度。華やかに飾り付けられた何百頭の牛は、首の鈴を鳴らしながら、山の上から列をなして村の広場へと下り、それぞれの農家へと追われていく。

そして演奏者たちも聴衆も、後ろ髪を引かれながら、翌年もまたここに来られることを願いつつ家路へ、あるいは次のコンサートの街へと旅立って行くのだ。